

小学校外国語活動における評価に関する実践研究

—教育実践フィールド研究に基づいて—

兼重昇(KANESHIGE Noboru)*, 松永宏(MATSUNAGA Hiroshi)**,
中村七帆(NAKAMURA Naho), 岩井美香(IWAI Mika),
関本春奈(SEKIMOTO Haruna), 河原未亜(KAWAHARA Mia)***

*鳴門教育大学, **鳴門教育大学附属小学校, ***鳴門教育大学大学院

要約

鳴門教育大学大学院では、学校現場における今日的課題について協力学校とともに実践的研究を行う授業「実践フィールド研究」が設定されている。本実践報告では、平成 21 年度大学院生による「実践フィールド研究」に基づいた実践を報告するものである。

平成 23 年度の小学校外国語活動の本格実施に先駆けて、本学附属小学校では長年英語学習として関連授業に取り組んできた。しかし、評価に関する課題についてはまだ十分検討されておらず本実践において、その可能性について実践研究を行うこととした。また、前年度の継続研究として、全国全ての 5, 6 年生に配付された『英語ノート』の活用についても併せて取り組んでおり、本報告ではこの二点について報告する。特に評価に関しては、最も小学校現場で多く使われている「自己評価」のあり方、実施の際の留意点について検討するとともに、「学びのための自己評価」の可能性についても提案する。最後に、次年度へ向けての改訂版振り返りカードの提案も行う。

(キーワード：小学校外国語活動，振り返りカード，『英語ノート』の活用)

1. はじめに

鳴門教育大学大学院では、教育課程の中に「教育実践フィールド研究」という授業が必修科目として設定されている。この授業では、学校現場における今日的課題を地域の学校から収集し、その課題をより実践的に解決する策を模索するのがねらいとなっている。

本実践報告では、附属小学校の協力のもと小学校外国語活動における課題として「評価」を中心的題材としてとりあげた。その背景は、平成 23 年度の小学校外国語活動全面実施

に向けて、その円滑な導入をすすめるために、平成 21 年度、文部科学省が「教材等の効果的な活用および評価のあり方に関する調査研究事業」と称した学校への支援事業を行ったことにある。しかし残念ながら、この事業については政府による「仕分け作業」により廃止となったわけであるが、ここで示されている「教材等の効果的な活用」「評価の在り方に関する調査研究」という二点は、まさに教育実践フィールド研究で目指す今日的課題としてふさわしいと考えた。

また前年度、同じく教育実践フィールド研究において、「小学校における『英語ノート』（試作版）にもとづいた外国語活動の授業実践」をテーマとして取り組みを行っていたために、同様のテーマを継続的に扱い、且つ「評価」に関しての研究テーマとして取り組むこととした。

以上のような背景に基づいて、本実践研究ではテーマを次のように設定した。

- ①小学校外国語活動における評価の方法として自己評価カード（振り返りカード）はどのようなものがよいのか。
- ②教材（特に『英語ノート』）をどのように活用するか。

2. 小学校外国語活動における評価

2. 1 評価の概念と小学校外国語活動

小学校外国語活動では、これまで「量的評価はしない」「テストは実施しない」「評定をつけない」等の様々な注意が行政的に説明されてきた。しかし、これは「評価をしない」ということを意味しているわけではない。評価の基本理念として、「目標と評価は表裏一体」であり、常に授業で何が起きているのか、児童が何を学んでいるのかを明らかにする必要があるという点では、小学校外国語活動において評価をすることは必要不可欠であると言えよう。

しかし、日本語で「評価」という用語は様々な意味をもつ場合がある。例えば、assessment（アセスメント）、evaluation（エバリュエーション）、rating（評定）、testing（テスト）、measurement（測定）、reporting（報告、通知票）、feedback（フィードバック）などである。こうした様々な意味をもったものを包括して「評価」と称されることがある。文部科学省(2009)では、これらを整理する目的で、上述の「assessment（アセスメント）、evaluation（エバリュエーション）について次のように定義をしている。アセスメント（assessment）とは、「児童の学習に関する情報を収集し、記述すること。テストはアセスメントの一形式」であり、エバリュエーション（evaluation）とは「アセスメントにより収集された情報を解釈し、価値判断を行うこと」である。

本来の評価の目的は、①教師が自らの授業を省察し、授業改善へつなげるため、②児童の学習意欲を高めるため、など様々あり、評価は一連の授業過程の一部であるとも言える。そのためには、「授業で何が起きているのかを明らかにする」「何を子どもたちが学んでいるのかを明らかにする」こと、すなわち assessment（アセスメント）がまず必要不可欠であり、そのための手段に対して我々は慎重に取り組んでいく必要がある。

一方、文部科学省では、表 1 のように三つの観点を示してそれに合うように評価をすることを求めている。これは、評価の基準にあたるものであり、小学校外国語活動の目的と

合致したものである。

表1 評価の観点及びその趣旨<小学校外国語活動の記録>

観 点	コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に対する気付 き
趣 旨	コミュニケーションに関 心を趣もち、積極的にコミ ュニケーションを図ろう とする。	活動で用いている外国語 を聞いたり話したりしな がら、外国語の音声や基本 的な表現に慣れ親しんで いる。	外国語を用いた体験的な コミュニケーション活動 を通して、言葉の面白さや 豊かさ、多様なものの見方 や考え方がることなど に気付いている。

しかし、この評価の観点が示されたとしても依然として、assessment(アセスメント)としての評価の手段を適切なものとしなければ、通知表や指導要録への記述についても適切に行えるとは言えない。また、この観点は本来、学校の設置者が決定するもので、全国一律に網羅しなければならないという訳でもない。本実践を行った際には、この文部科学省による提案がなかったことと、実践において「自己評価」をデータ収集の手段として活用し児童の意識の変化をみることを目的としていたために、この3観点を活用していないことを予め説明しておく。

2. 2 様々な評価（データ収集）の手段

本実践に先立ち、2. 1で挙げた小学校外国語活動における評価に関する理論的な外観を受講者全員で共通理解として持つこととした。また、実際にどのような評価の手段（データの収集方法）があるのか、またその実施に際しての留意点は何かを検討した。先述の文部科学省(2009)でも提案されている様々な手段について検討した点を個々に挙げる。

- ①アンケート、②テスト、③ポートフォリオ、④代替アセスメント、⑤真正アセスメント
⑥教室観察、⑦インタビュー、⑧チェックリスト、⑨自己評価・相互評価 等

まず、アンケートは、まとまった期間もしくは毎時間後にアンケート調査紙や振り返りカードなどを活用して行われることが多い。しかし、質問項目が抽象的で曖昧であったり、質問内容が実際の活動を反映していない等の場合、得られたデータは意味を持たない。特に毎時間後に行う振り返りについては「今日の授業は楽しかったですか」という問いに1~5（「全くそう思わない」～「とてもそう思う」）で答えさせるだけの振り返りカードでは、具体的にどの活動が楽しかったのかを後で明らかにすることは難しい。そのため、問いの後に、具体的な活動などを書かせる等の工夫が必要になってくる。

次にテストであるが、これは財団法人英語検定協会の実施する児童英検やその他にも応

用言語学研究機関でテスト開発も行っている Center for Applied Linguistics などが提案している SOPA(Student Oral Proficiency Assessment)など標準化されたテストがある。こうしたものを活用することで、英語という側面についてその学習内容の達成度を評価することも可能ではあるが、テストによる負の波及効果に注意する必要がある。本来小学校外国語活動では、英語のスキルを身につけさせることが一義的目的ではないはずなのに、テストで評価されるためにテストで点をとれるような授業・活動を行ってしまうというのがこの負の波及効果のことである。あくまでも多くの中の一つの手段であることを意識しておく必要がある。

ポートフォリオは、代替アセスメント、真正アセスメントなどとも称されるもので、これまでの多肢選択型テストに対する批判として起こったものである。学習者の学習活動をそのプロセスとプロダクトを共に組織的にファイルしておくことで「学び」を適切に記述していくための資料となるという考え方である。

教室観察は、いわゆる授業観察が中心となるが、観察者による学習者の行動への影響を考慮すると参与的・継続的に取り組むことで得られた結果の信頼性が高まると言われている。インタビューについても同様で、誰がいつインタビューをするのか、インタビューする項目は何かによって、得られる結果には大きな違いが出てくることを十分考慮しておく必要がある。

この他にも教師が授業中に行うチェックリストを使った学習者の記述は、授業内での発言回数や内容などを記録することである。授業をしながらの評価となると実行可能性が低くなってしまいが、ティーム・ティーチングや授業観察者の協力を得ながら進めることで、実行可能性を高めることも可能である。

最後に、本実践で取り組む自己評価や相互評価について、詳細については、次節で述べることとするが、これは最初に挙げたアンケート、振り返りカードと共通する部分が多くあり、多くの小学校で取り組まれている手段であると言える。

2. 3 自己評価

本実践研究では、様々な評価の手段がある中で、「自己評価」を取り上げることとした。その理由は、授業中に活用しやすく、振り返りカードへの記述は外国語活動だけでなく他教科・領域でも積極的に活用され、児童も慣れているからである。すなわち実行可能性高いものと判断したからである。また、教師の視点だけでなく児童の視点を可視化することで、複眼的に授業をみることができるという利点もある。これらに加えて、児童が自分のことばで授業を振り返ることで、学習者自身の自己省察を可能にするという学びの手段としても利用可能だと考えた。

しかし一方で、結果への信頼性、妥当性が低いという課題もある。こうした課題も踏まえて、本実践研究ではどのような自己評価が可能か、どのような振り返りカードが有効かについて取り上げていくこととした。

3. 授業実践

本実践は、協力校である本学附属小学校3年生を対象に行った。平成23年度よりはじまる小学校外国語活動は5,6年生を対象としているが、担当教員のクラスとの兼ね合いで3年生での実践となった。

教材は「英語ノート2」Lesson9「将来の夢を紹介しよう」を扱うこととした。このLesson選択についても多くの学校で「英語ノート2」は6年生で活用される教材であるが、担当教員のリクエストで、「将来対象児童が6年生になった時に同じ題材で、自分自身がどの様に成長したかと考える材料としても活用したい」という意図があったからである。発達段階との関係もあるため、実際の授業では、3年生児童の実態を考慮しながら授業計画立案、授業実践を行った。最終タスクとして、「将来の自分へのメッセージ」、「インドネシアからの教員研修留学生のタマラさんに夢を聞いてもらうためのビデオレター」をつくるという目的をもった活動とした。

授業は、担当の大学院生4人が話し合いにより図1のような活動計画をたて、2月下旬から4人が1時間ずつ授業実践を行った。

第3学年英語活動案		
わたしのゆめ・あなたのゆめ ～This is my dream～		
1 単元目標		
◎自分の夢を紹介したり友達の夢を聞いたりして、互いの違いやよさを認め合い、将来の夢に対しての前向きな気持ちをもつ。		
○世の中には様々な職業があることと、職業を表す英語表現の特徴に気づく。		
○自分の将来の夢について考え、伝え合う。		
○職業を表す英語の表現に慣れ親しむ。		
2 単元計画 (全48時間)		
時	目標(◎)と主な活動	主な評価の観点
1 中村	◎松永先生が3年生の時の将来の夢を予想し、職業を表す英語に興味を持ち、その表現を知る。 ①松永先生の子どもの時の夢を予想する。 ②職業を表す語を導入する。 ③ Guessing Game, ドンジャンケンゲームをする。 ④本時の活動を振り返る。	・身近な人が子どもだった時の将来の夢に興味を持ちながら話を聞こうとしている。 ・職業を表す英語表現を知り、日本語表現と英語表現の違いに気づく。
2 岩井	◎様々な職業の英語表現に慣れ親しむとともに、自分の将来の夢について考える。 ①前時の活動を振り返る。 ②「小学生の夢ベスト5」を予想する。 ③ジェスチャーゲーム、「だれのかばんでしょう？」ゲームをする。 ④「将来の夢」にも様々なあることに気づき、自分の将来の夢について考える。 ⑤本時のまとめをし次時の予告をする。	・職業を表す語を聞いたり言ったりしてゲームを楽しみ、表現に慣れ親しんでいる。 ・様々な将来の夢があることに気づき、自分が将来つきたい職業やしたいことについて考えている。
3 関本	◎自分の将来の夢やなりたい理由について考え、絵や言葉で表現する。 ①前時の活動を振り返る。 ②ミッシングゲームをする。 ③友達が様々な夢をもっていることに気づき、自分の将来の夢やなりたい理由について考える。 ④自分の将来の夢をイメージし絵や言葉で表現する。 ⑤本時のまとめをし次時の予告をする。	・自分の将来の夢やなりたい理由について、イメージしながら考えようとしている。 ・自分の将来の夢を絵や言葉で表現しようとしている。
4 河原	◎自分の夢を紹介する時の表現を知り、将来の自分にメッセージを残す。 ①前時の活動を振り返る。 ②将来の夢を紹介する表現を知り、練習する。 ③グループで、将来の夢を紹介し合う。 ④グループの代表が将来の夢を発表する。 ⑤将来の自分にメッセージを残す。	・将来の夢を紹介する表現を知り、友達に伝えようとしている。 ・将来の自分にメッセージを書き、自分の夢に対しての前向きな気持ちをもつ。

図1 活動案(ユニット計画)



図2 授業風景



図3 留学生によるビデオレターの視聴

教材づくりも協同で行い、絵カード(大・小)、振り返りカード、キーボード、デジカメ等を用意した。特に、「英語ノート」にある表現だけでなく、表2のように、授業内で児童の本当につきたい職業をたずねながら、それらを絵カードなどに反映させたり、児童に身近な人物(コメディアンや科学者、教師(担任教師))などを活用した。また一度授業で会ったことのあるインドネシアからの留学生のタマラさんにビデオで登場してもらいながら、児童が現実感を持って活動に取り組めるような工夫をした。



図4 児童のなりたい職業に基づいて作った絵カード

本実践の課題の一つである振り返りカードは、図4のようにし、「今日の学習で分かったことや思ったこと」「自分や友だちの良かったところ」「今日の学習を通してもっと知りたいこと、わからなかったこと」などに加えて、その都度必要と思われる内容をしめした。これは、先述のように、文部科学省の提案した評価の観点、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語への慣れ親しみ」「言語や文化に対する気づき」と明確に対応するものではなく、児童の視点から授業や活動の印象、友だちとの関わり、自身の理解度を示させるものである。その理由は、文部科学省からの観点例示の時期が実践よりも後であったことと、児童の学びについてより自由な記述を期待してあまり観点を絞りすぎないようという配慮をしたためである。

表2 実際の児童のつきたい職業一覧

児童名	職業		児童名	職業		
児童1	医者	心臓外科医	児童19	サッカー選手		
児童2	医者		児童20	サラリーマン	医者	サッカー選手
児童3	医者	管理栄養士	児童21	獣医		
児童4	医者		児童22	獣医		
児童5	医者		児童23	女優		
児童6	医者		児童24	女優	モデル	
児童7	宇宙飛行士	医者 小児科	児童25	デザイナー		
児童8	絵本作家		児童26	バスケット選手	野球選手	
児童9	絵本作家		児童27	パン屋さん	医者	
児童10	科学者	考古学者	児童28	ピアニスト	医者	
児童11	科学者	化石発掘者	児童29	弁護士		
児童12	歌手	鳥と空を飛ぶ	児童30	漫画家	宇宙飛行士	科学者
児童13	ケーキ屋さん		児童31	モデル	女優	
児童14	公認会計士		児童32	野球選手		
児童15	作家		児童33	野球選手		
児童16	サッカー選手		児童34	野球選手		
児童17	サッカー選手		児童35	レストランの店長		
児童18	サッカー選手					

ふりかえりカード

3年2組 名前 ()

①今日の学習でわかったことや、思ったことを書きましょう。

②自分や友だちのよかったところを書きましょう。

③今日学習して、あなたがもっと知りたいことやわからなかったことを書きましょう。

☆あなたのゆめは何ですか？

思っていたことを
ここでかいてみよう！

先生から

図4 ふりかえりカードの一例

4. 実践の結果

実践の結果を、最初に挙げた2つのねらいに基づいて述べていく。

順番は前後するが、まず「教材（特に「英語ノート）」をどのように活用するか」についてである。これに関しては、基本的なコンセプトとして「児童が表現したいこと」を扱うという共通理解をもって取り組むことで、児童自身が自分の表現したいことを考え、それを言おうとする姿がみてとれた。図5は、児童の作品の一例である。



図5 児童の作品（表裏）

一枚のワークシートの片面に自分のつきたい職業の絵を描き、裏にはその理由、そして将来の（6年生の）自分に対するメッセージなどを書き、単に職業名を覚えて表現するというだけの活動に終始しないような工夫をすることで、児童は職業に対する英語により興味を持ち、もっとたくさんの英語表現を知りたいという気持ちになり、次第に自分でも調べてみたいと希望するまでに至っている。これは、紙面の都合上具体例を提示できないが、「振り返りカード」にもその姿が表れている。また、既存教材をそのまま使うのではなく、学級担任や児童の良く知っている人物を絵カードに活用することで、授業中の児童の反応に差が出てくることも明らかになった。教具の作成は時間を要するものではあるが、児童の興味関心をより高めていくためには時間をしっかりかけていくことの大切さも明らかになった。

本来のねらいとは異なっているものの本実践で興味深かったのは、複数担当で作成した絵カードに文字が入っているものとそうでないものが出てきた場面である。児童は、絵カードに文字がない場合は音声をしっかり聞こうという姿がみられたが、文字が入った絵カードを提示されると、ローマ字読みで読もうとしたり、ワークシートに書き写そうとしたりという行動が多くみられた。ここで、絵カードに文字入れをするかどうかという議論は避けるが、児童の反応を良く観察し、ねらいにあった教具を利用することの大切さを認識させられた。

次に、振り返りカードのあり方について2つの児童の振り返りと教師のやり取りの例を挙げて検討する。

<事例1>

（授業1）

児童：「アスリートとアーティストの発音がにっていました。」

教師：「良いところに気づきましたね。他にもにている発音もあるかもしれないね（後略）」

（授業2）

児童：「前回見つけたものとまたちがったにている発音があって、いっぱい似ている発音があることがわかりました」

この事例では、教師の「他にも似ている発音があるかもしれない」という問いかけに、児童が授業の中でもそのことについて考え気づこうとしている姿が対話というかたちで見取れる。教師の肯定的フィードバックに「気づき」を深めていこうとしている

<事例2>

（授業1）

児童：「〇〇さんの言い方がよかった。」

教師：「〇〇さんの言い方のどんなところが良かったですか？」

（授業2）

児童：「〇〇さんの発音が良かった」

この事例では、教師の「どんなところが」という問いが、次時の振り返りでは具体的に「発音」の良さであることが児童の言葉として表れている。

このように、振り返りカードは、単に授業を振り返るという機能だけでなく、継続的振り返りカードを活用することで、教師と児童が対話することができ、それが児童の学びを進めていくきっかけになっていることが分かる。しかし一方でこのことは教師のフィードバックが児童の意識を焦点化しすぎてしまうことにもつながるという課題を示している。実際に事例2の場合、教師の「発音」が良いことに対する高評価が以降のこの児童の「発音が良いことは素晴らしいことだ」という意識につながっていることがみられた。

5. 実践のまとめ

本実践研究では、二つの課題、①小学校外国語活動における評価の方法として自己評価カード（振り返りカード）の可能性、②教材（特に「英語ノート」）の効果的な活用について検討することをねらっていた。アンケートの実施など数量的な分析を行うには至らなかったが、児童の学びを振り返り、学びそのものを助長するための振り返りカードの可能性については、示されたと思われる。また、前年度からの継続テーマである「教材の効果的な活用」については、児童を中心とした表現の抽出・教具づくりが重要であることが再認識された。

現在、本実践研究及び附属小学校の取り組みとして、新しいかたちの「振り返りカード」を作成し、実践を進めている。図6は、その一例である。

<p>英語学習ワークシート</p> <p>No. _____</p> <p>ユニット名</p> <p>_____</p> <p>めあて</p> <p>_____</p> <p>活動内容</p> <p>_____</p>	<p style="text-align: right;">年 組 番 名 前</p> <p>気付いたことや分かったこと</p> <p>_____</p> <p>ふりかえり</p> <p>○ 学習したことをふりかえりましょう。下の①②③④を使って書いてみましょう。</p> <p>① 「英語を使って気付いたことは、…」 日本語と英語の共通点や相違点 など</p> <p>② 「英対訳を注釈して気付いたことは、…」 認められなかったこと、英語の発音のよい点 など</p> <p>③ 「前の単元は○がふたけなど、△△でできるようになって…」 自分の成長したところ など</p> <p>④ その他(今後の学習でしていきたいこと など)</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>
--	--

図6 英語学習ワークシート（改訂版振り返りカード）

この改訂版振り返りカード（別称「英語学習ワークシート」）は、外国語活動におけるノートの機能も兼ね備え、以下のような3つの機能を持ったものとして開発し、実践を進めている。

①授業記録としての機能

小学校外国語活動で授業記録をする際の困難点を解消するために、授業中に「デジタルカメラ」を活用し、写真として具体的授業記録をし、そのうち2、3枚を授業後に左紙面に児童が自由にレイアウトしてのり付けする。必ず1枚は板書を含める。

②学習過程におけるメモとしての機能

授業の中で、児童が自由に気づいたことを、リアルタイムで書くことができるスペースで、メモ代わりに活用することができるもの。

③振り返りカードとしての機能

書き出しを例示して、授業の振り返りをするスペースで、具体的な書き出しの例示は、本校の研修主題に合うように構想してある。また振り返りの観点は、文部科学省が提案している3観点と整合性をとるように検討中である。

この改訂版振り返りカードの効用については、平成22年度附属小学校において実践を行っている。次年度以降、その結果を報告するものとする。

引用文献

文部科学省(2009) 『小学校外国語活動研修ガイドブック』東京：旺文社。